

春風秋霜 10月号

平成29年10月2日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一喬

1 いじめ問題について

いじめについての匿名のはがきが教育委員会や一部の市議会議員に届いています。匿名の上、具体的な学校名等が記載されていないため、特別な対応は難しいですが、「いじめはどこでも起きる」という緊張感を持つことは大切だと思います。

島田市では、重大ないじめ事件は近年発生していないものの、小さな案件は多く、常葉大学の太田講師と北海道大学の加藤准教授による調査では、60%近い子供たちが、いじめやいじめに類する被害にあったことが分かっています。また、50%近い子供が「加害経験がある」と答えています。教師に相談する時には、既に深刻な状況になっているという傾向も見られます。

重大ないじめ事件が起きていない時こそ、予防的な対応が求められます。7月に開催された総合教育会議では、「人間関係づくりプログラム」の必要性も確認されています。道徳の授業でもいじめ問題を扱うことになっています。具体的な事例を基に考え議論する道徳の授業を展開することで、自分たちで解決する力を付けさせることが求められています。

2 市防災訓練（五和小会場）に参加して

8月27日（日）には、市内各地で防災訓練が行われました。私も地区の防災ブロック長を引き受けているので、今回の訓練のために様々な準備をしてきました。防災備品の点検では、たくさん器具の所在確認だけでなく、エンジン類は始動確認も行いました。また、たくさんの廃材を使ったジャッキアップの訓練も行い、市危機管理課の職員の指導の下、防災マップの確認も行いました。大地震の時の電柱の折れや電線の断線が、ブロック塀の倒壊以上に避難行動の障害になることもわかりました。

五和小学校の訓練では、中学生のバケツリレーや、校舎3階からはしご車による避難など、子供たちが自主的に参加している姿が見られました。また、避難場所の区割りや汚物処理など、実際の発災を意識した訓練も行われていました。

このように、毎年変化する防災訓練ですが、市内にいる700人近くのジュニア防災士は、きっと、実際の災害時に貴重な戦力になってくれるものと思います。本年度に資格の取得が期待される生徒が、昨年同様に大変多いと聞き、各中学校での取組に感謝します。



3 学校訪問を通して

9月に2校の学校訪問を行いました。神座小学校では、子供が作った「台風18号」という詩を例に、批判的な評価ということが話題になりました。北島委員は、「青田から 秋が来にけり 今朝の風」という小林反古の俳句を紹介し、秋なのになぜ青田なのかを説明してくれました。それは、現在と稲の品種が違うことと、旧暦が関係しているということです。今のように早稲（わせ）品種が無かった時代は、10月中旬から11月にかけて稲の収穫が行われていま

した。そのため、9月にはまだ稲の穂は青いのです。「秋なのになぜ稲が青いのか？」という、批判的な問いが作品を深く理解することにつながります。

「・・・ 台風風の風はすごい 大きいつなみをつくる ・・・」この詩では、台風の激しい波を津波と表現してしまった子供の思いはよくわかります。しかし、津波と高波は別物です。子供の思いを大切にしつつも、作品をそのままよしとするのではなく、違和感や疑問を持った者の一言を大切にすることが、作品を高めたり、読みが深まったりすることにつながり、正しい理解につながることもあります。子供の作品を全て子供の個性と受け入れてしまうことには、一考を要すると思いました。

4 保護者からの手紙について

六合小学校に2学期から転校してきた2年生の保護者より、感謝の手紙が教育委員会に届きました。2学期の始業式の前日に、教頭先生からクラスと担任を知らせる電話があったことや、始業式の当日に校長先生がしゃがんで親よりも先に子供に挨拶したことなど、子供の不安に配慮した対応がうれしかったというものです。

同じ対応をしても、感じ方は様々だと思います。しかし、不安を持って転校してきた家族にとって、スタートがこのような感謝で始まれば、学校の応援団が一家族増えたことになります。学校への要望が多く、時にはクレームと思われる発言も多くなってきた昨今、このような手紙は、教員の心の支えになると思います。

肘かけ椅子

南條 隆彦 社会教育課長

『君の名は。』

脚本家の沖方丁（うぶかた・とう）が、NHKラジオエッセイで語っていた、生きものの数え方。

魚やエビが、一尾、二尾。牛や馬が、一頭、二頭。蟹は、一杯、二杯。この使い分けは、どこから来ているのか。それは、その生きものが食べられた後に残される部位に由来するという説。それでは、人は、というと、人は死したのち「名」を残すと。だから、一名、二名と数える、というお話し。

古来、陰陽道では、「名」はそれを定義し呪縛する、もっとも短い呪（しゅ）だという。平安貴族は、自らの真名（まな）を明かさなかった。知られると呪詛（じゅそ）されるからだ。

「真名」の信仰は、今も息づく。魔法と現実の均衡がテーマの「ゲド戦記」で、王子は失われた自我を「真の名」を知ることで取り戻す。住民の多くが超能力を持つ町の物語「サクラダリセット」で、ヒロインの少女は、一度死んでアイデンティティを捨て、「名前のないシステム」として再生する。「君の名は。」では、名前は文字どおり主人公のふたりを結びつける主題だ。

自我の形成に欠くことのできない、このアイデンティティは、青少年期に確立していくという。親からの独立心と不安、友達との関係の中での自我との葛藤、組織の中の自らの存在意義。この時期、混沌の中でアイデンティティは揺れ動く。

さて、「君の名は」と問われて……。自己のアイデンティティは。お前は何か。そっと胸に手を当て、名前を唱えてみる。